

# 利他<sup>りた</sup>の心・利他<sup>りた</sup>の行動<sup>こうどう</sup>

そのだ ひさこ

今まで経験のない、未曾有のウイルス感染拡大…。新型コロナウィルスは人間に付着して移動し、人間と共に生きていて、血液の中に入りこみ、人々に大きな被害を与える。目に見えないものと人間との封じこめ競争のなかで恐怖におびえつづけてきた日々。何より、昼夜を問わない医療従事者の方々の骨折りのおかげで私たちの「今」があるが、〈自分の命を守ること〉が〈他の人々の命も守ることになる〉という抜き差しならない《利他の心・利他の行動》を私たち一人ひとりが具体的に刻々、迫られている日常と言えるかもしれない。

誤解を恐れずに言えば、私たちは人は、ある意味エゴの塊である。「エゴのない人はいないよ!」ということが、私の数十年の人権の講義や講演の入り口であり、ベースだった。同和問題をはじめ、他の問題も「きれいごとは、命や人権の侵害を無くすどんな力にもならない。」というのが私の実感だ。けれど、エゴ200%になると、人類は滅びる。そうならないために、多くの危機を乗り越えてきた人類の英知と築き積み上げてきた文化や科学がある。だが、〈今〉は24時間の生活の隅々まで、一人ひとりの利他の心、利他の行動が不可避になってきている。けれども、個人も集団も、国家も、世界中が命の危機にさらされているこの〈コロナ状況〉においてさえ、国内でも、国家間でも、エゴのぶつかり合いや争いは数えあげるときりがない。本当に、人という生きものは、何かにつけてすぐ自分を絶対化してしまう生きもの! 富、能力、社会的な地位、学歴、親や家柄など、自分の努力の結果だけでなく、自分の憎しみや悲しみさえその材料になる。

私は訳あって、何よりも自分がこの世に生まれたこと自体を憎み、産み育ててくれた母を恨み、とげだらけの心と肉の痛みのような悲しみを抱きしめ育った。自分の憎しみや悲しみの増幅、それも自分の心身をぼろぼろにする。そんな私は、人が自己絶対化に陥らないためのキーワードのようなものに、幾度も出会わせていただき「今」がある。それは何よりも、自分の人としての貧しさの故であるが。20代の終わり、なぜか京都の東本願寺に講演に出かけた。当時の私にはいわゆる信仰らしきものは何もなく、今も全く無知に等しい。にもかかわらず、親鸞(しんらん)さん<sup>(笑)</sup>を私は大好きである。無知な私は法事などお経を聞くときは身体中の力を抜いて、ほおっとただ聞いているが、時々言葉が自分のところにストン!と降ってくる(笑)。自分に触れる言葉だけが…。高齢になっても、今は、少しでも自分の人生を豊かに取り戻したい思いで生きている。親鸞の「凡夫(ぼんぷ)」という言葉は、「人はみな凡夫に過ぎない」というすべて人の在り方、すべての人が立っている水平な地平を言っている。八百年の時を越えて、自己絶対化をしてしまう人間を引きずり下ろす(水平な地点)を提示していると私は思っている。

●TUNAGU IIとは 人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所副理事)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

●問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当